

螢の河

伊藤桂一

の 河

伊藤桂一



光人社刊

螢の河

定価1200円

昭和57年7月26日 印刷
昭和57年8月7日 発行

著者 伊藤桂一

発行者 川島 裕

発行所 株式会社光人社

東京都千代田区九段北1-9-11

振替番号・東京7-54693番

電話・東京(03)265-1864〜7

ISBN4-7698-0183-1 C0093 ¥1200 E 2241

乱丁・落丁のものはおとりかえいたします

本文印刷・慶昌堂印刷株式会社

色彩印刷・興伸社 製本所・松栄堂製本所

「螢の河」目次

螢の河 5

水の上 25

氾濫 39

鵜を撃つ 51

黄土の記憶 63

廟 93

黄土の牡丹 131

雲と植物の世界 181

生の時 死の時 227

陽の沈む方へ 245

解説 273

カバ！・扉絵

山崎佐一郎

螢
の
河

螢
の
河

ぼくは小舟の上で眠りながら、水に落ちた経験が一度ある。このことはぼくにとって、きわめて名誉でない出来事なので、いままで誰にも黙っていた。が、これをここに明かしておきたい理由の一つは、この出来事を記すことによって、たぶん内地のどこかに生きているに違いない、ひとりの旧友をみつげ出したいためと、もうひとつはこれによって、ぼくが久しく愛してきた中支那江南地方の風物を、ぼくの記録の中につけ加えることができるからである。

ふしぎなことだが、ぼくは小舟から真つ逆様に水に転落したとき、水の底へグングンと沈み落ちてゆく感覚と、本能的にもがいて水から浮いてくる刹那しじなの意識とを、未だに明確に記憶しているにかかわらず、そのとき水中で、一滴の水も飲まなかった。これはぼくが曲がりなりに水泳の技術を身につけていたからだとしても、あの場合水を飲まずにすんだということが奇妙でならない。もしかすると人間は不慮の危機に際しても、案外天性の防衛能力が働くのか知れないのだ。これは見方によれば、得難い経験だったともいえよう。

ぼくは鶏三〇六四部隊の編成要員として、佐倉の歩兵第五十七連隊へ召集された。召集兵の中では、野戦の経験をもっている者は一個分隊に二、三名しかなかった。かれらは戦争馴れがしていて、どこへ持って行かれようとさして気にもとめず、はじめての応召者や補充の入隊兵などが、しきりに先行を不安がっているのを、少しばかりは滑稽に考えていたものだ。中隊の編成がまとまってゆくにつれ

て、初陣の活氣というものが充滿してきたが、野戦帰りの連中には、これは有難迷惑のようなものだった。緊張というものは敵と遭遇した時だけすればよいので、常住緊張していたら神経がもたない、とかれらは達観していた。中隊長は一年志願を再役して進級してきた中尉で、これは戦争体験をもっていたが、ほかの幹部はほとんどはじめての出征で、特に、配属されてきた数名の幹候見習士官が、むやみに張り切っているのには、古い連中は全く辟易（へきえき）していた。新設の部隊だし、ことさら互いの違和感が生じるのである。

柄は大きいが子供っぽい顔をしていて、そのくせおそろしく横柄な男がぼくらの小隊長となった。彼は見習士官として、兵隊に対する優越感を持て余しているようにみえた。こういう男が戦地で揉まれてサビがとれるまでには、部下になった者はいいい加減苦勞をしなければなるまいと、ぼくたち古い兵隊はこぼし合った。が、中隊編成を終わった初の閲兵式のときに、ぼくは幸い、この小隊長の許から離脱することができた。ぼくは他の小隊へ引き抜かれたのである。閲兵式のときは、兵隊たちは間隔をおいて営庭に行列横隊に並び、その間を、中隊長を先頭に、中隊幹部が順々に廻って歩いた。つまりお互いの顔見世の訳である。この目を境として、爾今は一体となって死生の間に向かう訳だから、儀式としては厳肅だったが、次から次と廻ってくる幹部たちが、あまりにも厳肅すぎる表情をしているのにぼくは驚いた。やりきれなくなってきた。

その幹部の中でも、もっとも強い緊張をしている見習士官が一人いて、背が低いので背伸びするような恰好で、すぐく眼をギラギラさせ、兵隊の顔を一人一人丹念に覗き込むようにして歩いていた。ぼくは遠目にチラリと彼をみたとき、どうしてもその顔に見覚えがあり、しかもそれはかなり親しい間柄だったという記憶で、しきりに考えたがどうしても急には思い出せず、仕方なく順番を待った。彼の方で発見してくれるだろうと予想したからである。

果たして彼はぼくの前へくると、一瞬いぶかしげに眼を細め、足をとめ、それからふいに笑顔をみせると、「おう、ここに来ていたのか」と声をかけてきた。非常に懐かしげな表情になった。ぼくも思わず「やア」といった。「やア」と気楽にいったのは、彼が言葉をかけてきた刹那に、ぼくも彼が誰であるかを確認したからだ。うしろへつづいてきているぼくの方の小隊長が、怪訝な眼つきをしたのでぼくはそれきり黙った。彼は、「あとでまた相談する」といい残して歩き出したが、それからは前程丹念に兵隊の顔を点検しなくなったのを、ぼくは視線の届く限り横眼でみていた。その日のうちにぼくは、小隊長同士の、かなりもつれた交渉の結果、彼の小隊へ移された。交渉がもつれたのは、ぼくが野戦の経験者であることと、擲弾筒手としての特別教育を受けていることの二点だった。野戦経験はともかくとして、擲弾筒手というのは、中隊にもあまり数がいなかったのである。

擲弾筒というのは（すでに記憶もあやしいが）直径六、七センチ、筒の長さ三十センチ、それに柄のついている極小型の一種の手持ちの砲のようなもので、それを地上に四十五度の角度で置き左手で発射の反動を圧さえる。榴弾と手榴弾と双方使用できたが、榴弾は大きく弧を描いて飛び、落ちるとこの小さな筒から発射されたものとは到底思えない、おそろしく大きな地響きをたてて炸裂した。威嚇には相当の効果が、軍では秘密兵器になっていた。

実をいうとぼくは、怠惰な擲弾筒手で、筒の分解方法も忘れてしまっていた。戦闘体験にしても、それをもっているからといって、別に強い兵員であるとは限らない。ぼくは久しく北支那にいたが、脳裡に刻まれている印象は、黄土の地肌を背景に咲く罌粟の花畑や、灌木帯の麓をすさまじい鮮烈さで刷っていた連翹の花々、それに点々と地を潤しているたんぼの花などだ。ぼくの抒情の眼は、どんな苛烈な日日にいても、遂に美的なもの以外は見なかったようなのだ。ぼくのような兵隊が、この小隊に移ろうとさしたる問題はないのだが、未知数の兵力を握っている小隊長としてみれば、いく

ぶんの既知を頼りたかつたのだろう。

ぼくの新しい小隊長となつた見習士官の安野は、十余年前、世田谷の中学に通つていた同級生だつた。彼は成績も中位だし、あまり丈夫そうでなく、たいがい校庭の隅の樹の下で、リーダーの勉強に頭を悩ませていた。ぼくと、特に親しい間柄ではなかつたが、こうした特殊な境遇の中でめぐりあつてみると、はじめて戦地へ出る安野には、よほどの心強さであつたらしい。ぼくが彼の小隊の一員になることが正式にきまつたとき、彼は、ぼくが視線のやり場に困るほど、眼を輝かせてぼくをみつめ、手をしっかりと握りしめて来、しまいにぼくが滑稽感を覚えるほど、自身の感動に酔つていた。

ぼくは部隊が、南京警備の一環として、その周辺に分駐する任務であることを耳にしていたので、だいたいの危険度は測り得ていた。北支那の重疊たる山岳地帯にくらべると、そこらは雲泥の差で治安がいい筈だつた。ただ安野もまた他の兵員と同じように、死地へ向かうという悲壮な感慨に憑かれていて、ぼくに向いて何度も、「頼むぞ、おれが死んだら骨を拾ってくれ。お前が死んだら、おれが骨を拾つてやる」とくり返した。仕方がないので、ぼくも何度もうなずいた。ぼくは内心、二〇三高地を攻める時だつて、これほど意気込みはしなかつたろう、と思つたが、安野のぼくへの過大評価は決して悪い気はしなかつた。彼の態度は純一で、ぼくにこそばゆいあたかみを伝えた。幹候教育を終わつてきたばかりで、張り切つてゐる彼の気持もよく分かつた。ぼくは期待されると変に情に脆くなるので、もしかすると安野の為に、彼が男泣きするような、壮烈な戦死をするのではないか、と漠然と予想した。ぼくのなかで、警戒しなければいけない、といいきかせてくるものがあつた。北支那では中隊の三分の一は、戦死と戦病と戦傷で欠けたが、体力も精神力も弱いぼくは、案外にのんびりと生き残つてきた。その理由は、誰からも期待されていないという気楽さと、一応自身を放棄しながらも、いやがらせに死なずにいてやれ、という抵抗感で、怠惰なくせに粘り強く、風土や環境に耐え

てきたからである。しかし安野に、切実な感慨をこめて手を握られてみると、正直にいったやりきれない気の重さも生じてきた。これからの一挙手一投足、すべて安野の期待につながれば彼は承知しないだろう、と思うと、擲弾筒の分解方法を忘れていたことまでが、奇妙に気になってきた。

——昭和十×年の初冬、ぼくは安野小隊の一員として海を渡った。もちろん背には荷厄介な、八九式重擲弾筒というのを背負っていた。

ぼくは漠然としか安野の性格を覚えていなかったが、軍という特殊地帯で改めてつきあってみると、意外に純真で子供っぽく、ぼくの最初の小隊長のような、思いあがった優越意識をもたなかった。彼はN大の夜間部を苦学して卒業してきたので、一通りの苦勞は身に積んできたのに違いない。彼は部下の兵隊たちと、同じ次元の中に生き戦いたいとする、素朴な理想に燃えているもののように思えた。従って部下に対しては全くの温情主義で、絶対に手をあげるようなことはしない。死生を共にする立場として、全面的に部下を信頼するという態度だった。これはしかし統率者としてはやや感傷的に過ぎるのだが、その代わり、年次の古い、軍隊の階級制度の被害を若干なりとも受けている連中には、なかなか評判がよかった。かれらは小隊長としての安野が、経験も浅く大して頼りにならぬだろうことをとくに承知していた。そしてそれだけにつとめて心がけて、彼のために役に立ってやろう、とする気風が暗黙のうちに内部に醸成されていたのである。その点兵隊は単純なものだったが、小隊長と特殊関係にあるぼくには、このことはたいへん有難かった。ぼくが安野と近づくとに於いても、とても懸念したのは、小隊長に対する不人氣がもとで、ぼくと安野の関係への、警戒と猜疑さいぎの眼が向けられはせぬかということだった。

ぼくらの部隊は、南京に兵団の司令部を置き、その周辺へ分駐した。連隊本部、大隊本部、中隊本部と次第に小さな町へ村へと散らばり、そこを基点として、場所によっては数名の分屯隊まで派遣した。安野小隊は、揚子江の支流、清水河沿いにあるS鎮という部落に、まとまって駐留した。ぼくらは下流の当塗県から巡航船を利用して溯上したが、途中の部落にはまだ、ぼくらに警備地を申し送るために、祭兵団の兵隊たちが残っていた。かれらは当地をぼくらに譲り、ビルマに向かうことになっていた。

南京から蕪湖、蕪湖から当塗、当塗からS鎮へと溯^{さかのぼ}ってくるあいだ、ぼくは中支那江南地方の水彩の情趣が、予想にましてみごとなのに驚いた。風景は明るく快調だった。そこには凄惨な戦闘を連想させるものは何もなかった。清水河は薄濁りだが満々と水を湛え、兩岸は榆^ユや楊柳の木叢がつづいている。春なら唐詩の世界にあるように鶯が鳴くだろう。

巡航船には船員のほかに警乗兵が二名乗っていて、船首には一応軽機関銃が据えてある。ほとんど敵からの攻撃は受けたことがない、と警乗兵はいった。ぼくらは申し分のない旅行気分を味わっていたが、はじめて外地にきた兵隊たちはやはり落ちつかず、ことに安野は小隊長としての責任から、終始甲板の上で、双眼鏡に眼を当てていた。そんなときも彼は、ぼくを話し相手にして側においた。ぼくは彼が風物を楽しんでいるのかとはじめは思っていたが、そうではなく、すべて敵情の視察に尽きっていた。

「おい。あれは便衣隊ではないか。銃を担いで歩いている」

彼は気負った眼をして、ぼくに双眼鏡を渡したりした。ぼくはいっとき、レンズが引き寄せる風景を楽しんだ。

「便衣隊じゃないですよ。あれは農夫が鋏^{くわ}をかついでるんです」

「そうか。だが、油断はならんな」

彼は実に、一分の隙もない動作で、さかんに警戒をつづけた。そして時々思い出したように、「いよいよ敵地だな。死ぬときは一緒に死のう」といった。この言葉はすでに内地を出てからの彼の口癖になっていたが、ぼくにはぐるりの明媚を極めた風光は、些かも死の予兆をもっているとはみえなかった。それは平穩な充溢と静かな息づかいのままに、いま一つの季節を終わろうとする自然の豊かさでしかなかった。水を巻き上げて船はかなり快速で進んでいたし、河幅は約五十メートル、かりに對岸から発砲されたとしても、ほとんど心配のない状態なのだ。

ぼくは傍らに誰かいると、上官と部下の態度で接したが、全くの二人きりだと、彼を「お前」とか「安野」とか呼び棄てにした。そんなときぼくは、彼とさし對つて昔の中学の校庭にいるような、ごく密接した友情と安堵をかんじた。もっと素直に彼の感動についていってやるべきだと思った。ぼくは軍隊の階級制度には多大の被害を受けてきた一人だったので、安野に対しては敬遠的な距離をとってやろうかと、ふっと考えることもあったが、考えるだけでやはりダメだった。

ぼくは中支那へ来てみて、実のところ、敵の少ないのに驚いた。S鎮はそれでも中隊では最前線の基地で、煉瓦造りの兵舎も堅固だし、トーチカには野砲が一門据えてあった。ところで、ここへ着いた日の夜、意外な敵襲があった。夜更けに西北方の丘陵地帯の辺からさかんな銃声がきこえ、流弾がしきりに陣地の上を掠めた。油断していたぼくらは相当にあわてて応戦したが、しばらく経つと銃声もやみ、敵の攻めてくる気配もなくなった。夜つびてぼくらは陣地についたきりだったが、ぼくの隣にいた古い兵隊が、「友軍の銃声に似ていたな。どうもおかしい」といった。そういえば輕機の音も重かった。夜が明けると、S鎮を申し送ってゆく筈の祭部隊の一部が、どこからか帰ってきた。かれらはその日のうちに、兵務万端を申し送って船で新しい任務地へ出発していった。しばらくあとにぼ

くらは、昨夜の夜襲はかれらの行為であったことを知ったし、実弾をもって交戦まで経験させてくれた思いやりのある置き土産に感心した。もしかするとそのようにして警備地を譲り渡してゆくのが、かれらのならわしであるのかしれなかった。そしてこれも警備地が平穩でありすぎるための、特別の訓練だったのかもしれない。

たしかにぼくらはその後、ほとんど銃声というものを耳にしなかった。附近の肅清に歩いても全く敵影をみない。ぼくは北支那では一夜として銃声をきかない日はなかった。毎夜、山匪が下山してくるからである。しかしここでは河とクリークと畑地と水田ばかりで、西に低い丘陵があるだけだ。清郷工作の実績があがっていたというより、こうした見通しのよい、しかも足場の悪い場所では、敵の部隊はまとまって歩けるものではなかった。だが、まれには少数の便衣隊と遭遇した。

はじめて敵と銃火をまじえたとき、ぼくは安野が、どういう指揮をとるか、それに異常な関心をもった。そのとき、彼はおそろしく昂奮していたが、それは敵を攻める為でなく、すべて部下を負傷させないための配慮からだった。戦闘馴れのした連中は、安野を無視して先へ進みたがったが、それが彼の氣に入らなかつた。丘陵の灌木林の遠くから、浮き足立って撃っているだけの敵で、少し押せば逃げ散ってしまうことはわかつていた。

「おれも随分戦闘はやったが、敵を攻めて怒鳴^{どな}られたのは今度がはじめてだ。しかも安野の奴、軍刀を抜いて、命令をきかぬと斬るぞっていったのには度肝を抜かれたな。奴はあんまり夢中で怒鳴るもんだから、しまいに鼻提灯を出しやがった。鼻提灯だぜ。おれはそれをみたら、鉄砲撃つ氣もなくなつて、仕方がないから寝転んでたんだ。——しかし奴はいいところがある。この分だとおれたちは、絶対無事で満期だな」

あとで、古い兵隊たちはそういつて笑った。かれらはよく、ぼくに何かにつけ、「お前、安野にそう

いえ」などと冗談をいったが、それらはすべて小隊長への親和感から発していた。つまり安野は、幸か不幸か、多くの統率者たちと全く違った方法をとったために、逆に小隊の気風を明るく収攬（しゅうらん）することに成功したのだった。幸か不幸か、といったのは、それゆえに彼は、また、思いもよらぬひどい罰則を受けることになったからである。

季節は春になっていた。ここらは土質の關係からか、河に棲む魚はウナギやカジカの類も赤土色をしている。兵舎の脇の洗い場の下で、そんな魚が非常によく釣れ兵隊たちを楽しませた。安野も兵隊と一緒に釣ってよく魚を釣っていたが、その日運悪く、陸路をトラックで視察にきた中隊長に、遊んでいるところをみつかったのである。

中隊本部は、同じ河筋を十キロばかり下ったK鎮にあったが、毎日有線通信で戦況の報告等をしてきた。中隊長が視察に来たのはその時がはじめてだったが、それには理由があった。一つは分屯個所が多いため容易に廻り切れなかったこと、もう一つは中隊長自身が中隊本部の兵員を連れて、周辺の肅清討伐に明け暮れていた為である。この討伐は実に徹底していて、戦闘への病的な執念に発しているものだった。中隊長は目に立つ功績を挙げたかったし、それによって自身の進級を急いでいたのである。この地区は不眠不休で駆け廻っても、何しろ敵影が薄いことから、モーゼル拳銃一挺を鹵獲（ろくかく）するにも、骨身を削る辛酸を重ねねばならない。事実ぼくらは、中隊長と一緒にトラックに便乗（べんじよう）してきた中隊本部の兵隊たちをみたとき、これが同時に故山を発ってきた仲間だったのかと訝（いぶ）かざるを得ない程、かれらはすさまじく陽に焼け眼付きが鋭くなり、それでいてどこか憂鬱な殺伐さを秘めていた。兵を怒らせておくことが戦闘の要諦だ、と中隊長は幹部に教えたことがあるそうだが、かれらの殺伐は、たしかに精悍（せいかん）な戦闘力には通じていた。

ぼくらが中隊長を迎えるための整列を終るまで、中隊長は背を向けて河を見ていたし、本部の兵